鬼子母神の物語論的研究

中井本蓉

はじめに

日蓮宗において鬼子母神は広く信仰を集めており、「鬼子母神の物語」と聞けば、ある特定の型を持った物語を多くの人が想起し、語ることができる。しかし、この物語の典拠となっていると思われる経典は複数存在しているにもかかわらず、ほとんど触れられることがない。

このことから、「鬼子母神の物語」には、「人々の「語り」のなかにある物語」と、「経典（テキスト）として保存されている物語」の二種類が存在するのではないかと仮定した。

そこで本研究では、「現在語られている鬼子母神の物語」と「鬼子母神が釈尊に帰依したこと（帰仏）を説く経典」との比較をとおして、両者のあいだの差異を確認するとともに、「物語論」における「機能」という概念をもちいて、両者のあいだの共通点についても検討したい。

現在語られている鬼子母神の物語

現在、日蓮宗において語られている鬼子母神の物語は、おおむね次のようなものであろうと思われる。

昔、鬼子母神が人の子どもをさらって食べるので、人々が釈尊に助けを求めたところ、釈尊は五百人とも千人とも（あるいは一万人とも）いわれる鬼子母神の子どものうち、一番末の子どもを隠した。最もかわいがっていた末子がいないことに気づいた鬼子母神は髪を振り乱してわが子を探し求め、七日間さまよったのち、八日目についに釈尊のもとへたどり着いた。鬼子母神は、なんとかして子どもに会わせてほしいと釈尊に懇願した。すると釈尊は、「たくさんの子どものうちの一人を失っただけでもお前はこんなに苦しんでいる。一人か二人しかいない子どもを失った親の嘆きはいかばかりであろうか」と鬼子母神を諭した。これを聞いた鬼子母神は自分がいかにむごい行いをしてきたかをさとり、もう二度と人の子どもを食べず、これからは釈尊に帰依し、小さい子どもの守護神となることを誓ったので、釈尊は隠していた子どもを鬼子母神に返した。

現在、このような物語が語られているが、実はこれとまったく同じ内容の経典は見当たらない（詳細は次章において確認する）。また、この物語は語る人によって細かい点（鬼子母神や末子の呼び名等）において違いが見られるが、それぞれが別個のものとして認識されることはなく、「鬼子母神の物語」という共通のものについて語られたものと見なされている。

鬼子母神の帰仏を説く経典

次に、「鬼子母神の帰仏を説く経典」と、その内容について確認したい。鬼子母神に関する経典については、金岡秀友「鬼子母の思想の成立」（宮崎英修編『鬼子母神信仰』、一九九二年）において詳しく解説されている。これによれば、鬼子母神に関する経典の種類は、鬼子母神が釈尊に帰依する説話を含むものだけでなく、別の話のなかに鬼子母神が登場したり、鬼子母神に関する修法や儀軌、陀羅尼等について書かれた密教系のもの、そして鬼子母神の名前

のみ出てくるもの等、多岐にわたっている。

本研究は、「釈尊の教化によって鬼子母神が仏教に帰依し、子どもの守護神となる」という「鬼子母神の帰仏物語」について考察することを目的とするため、鬼子母神に関する経典のなかでも、「鬼子母神の帰仏を説く経典」を取り上げ、その内容について検討していきたい。

「鬼子母神の帰仏を説く経典」として、金岡［一九九二］に紹介されているものは次のとおりである。（傍線部は「現在語られている鬼子母神の物語」と異なる点）

①義浄訳『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻第三十一第七門第一子（大正二十四、三六〇中―三六三中）

まず、薬叉女の「歓喜」が生まれ成長する過程が語られ、次に「歓喜」が結婚して子どもを五百人産んだのち、人の子を食べるようになり、「訶梨帝薬叉女」と呼ばれるようになる。釈尊によって隠された末子の名前は「愛児」で、この末子を探した日数は明記されていない。「訶梨帝薬叉女」が帰仏したあと、「訶梨帝薬叉女」の前生の因縁（牛飼いの妻であったときの出来事）が詳細に語られる。そして、最後に、「訶梨帝薬叉女」が釈尊の教団を守護しながら生活しはじめ、彼女が食べるものを教団が用意する等、教団のなかに新しい決まりごとが生まれていく様子が描かれる。

②釈宝雲訳『仏本行経』巻第四広度品第十九（大正四、八二上―八三下）

鬼子母神が人の子を食っており、それを釈尊が教化して改心させ、鬼子母神が授戒したことが簡潔に説かれている。鬼子母神の名は「諸鬼母」または「諸鬼子母」、末子のことは単に「最小子」と記されている。子どもの数と、子供を探した日数は不明である。「諸鬼子母」が釈尊に帰依したあと、野原を埋め尽くすほどの多くの男女

やその子孫、そして鬼の子の男女が釈尊に帰依したとある。

③不空訳『大薬叉女歓喜母并愛子成就法』（大正二十一、二八六上―二八九中）

「支那国」に住む「歓喜」と名付けられた「大薬叉女」が釈尊のもとに詣でる。「歓喜」は五千人の眷属を従え、子どもは五百人である。釈尊は「歓喜」に、「暴悪」な気質を捨て、王舎城および贍部州（閻浮提）のすべての女性が生んだ子どもを守護するよう命じる。「歓喜」が、自分と子どもたちは何を食べて生きていけばよいのかと聞くと、釈尊の弟子たちが食事を用意するので、名前を呼ばれた時に来ればよいと言われ、「歓喜」は釈尊の言う通りに子どもを守護することを誓い、陀羅尼を説く。この経典においては、「歓喜」=「暴悪」な（おそらく人の子を食べる）薬叉女、という前提で話が展開し、「歓喜」が人の子どもを食べる場面も、隠された末子を探してさまよう姿も描かれない。

④吉迦夜・曇曜共訳『雑宝蔵経』（一〇六）鬼子母失子縁（大正四、四九二上）

「鬼子母」が人の子どもをさらって食べるので、人々が釈尊に助けを求める。釈尊は一万人いる「鬼子母」の子どものうち、末子の「嬪伽羅」を隠した。「鬼子母」は「嬪伽羅」を探して世界中を七日間さまよったのち、釈尊のもとにたどり着き、釈尊に諭され、受戒して帰仏し、「嬪伽羅」を返してもらう。最後に、「鬼子母」の過去世について、「迦葉仏の時代に、羯膩王の第七番目の王女として生まれた時、功徳は大いに積んだが、持戒を怠ったため、鬼形に生まれた」と説かれている。

⑤失訳『仏説鬼子母経』（大正二十一、二九〇下―二九一下）

釈尊が弟子と共に「大兜国」を遊行している時に、「鬼子母」に子どもを食べられ、わけも分からず親たちが嘆き苦しんでいるという状況に遭遇するところから話が始まる。「鬼子母」の子どもは天上に五百人、地上に五百人いて、全員が凶悪な鬼王である。そして、「鬼子母」に悪事をやめさせるために、釈尊の弟子たちが十数人の子どもをさらってくる。「鬼子母」は我が子を求めて十日間さまよい、釈尊の弟子の導きによって釈尊のもとへたどり着く。「鬼子母」は釈尊の教化によって改心し戒を受け、子どもを返してもらう。さらに、釈尊の教えによって、自分だけでなく千人の子どもたち（鬼王）が犯している罪を深く悔いたので、須陀洹のさとりを得る。そして母子共に釈尊の精舎に留まり、人々に子どもを授け、苦悩を除くことを誓った。

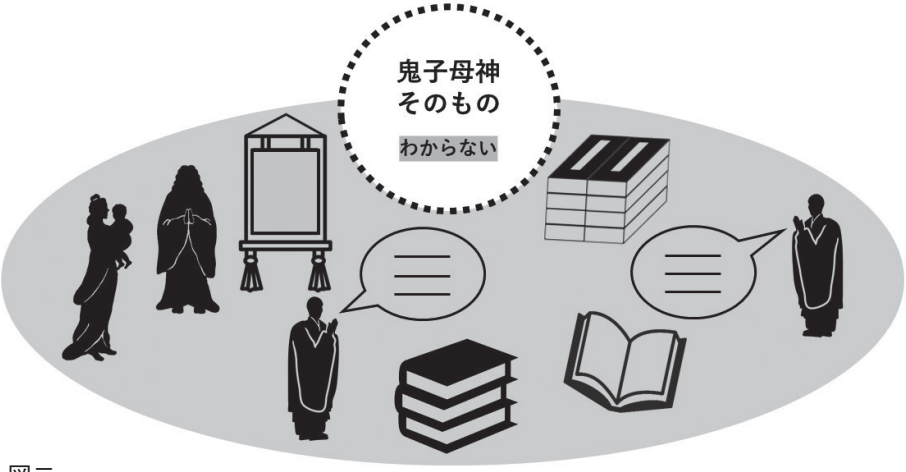
⑥釈曇景『摩訶摩耶経』巻上（大正十二、一〇〇五上―一〇一五上）

忉利天において、摩耶夫人が釈尊の徳を讃えるなかで、鬼子母神の帰仏物語が説かれる。「鬼子母」が人の子どもをとって食べていたので、釈尊が「鬼子母」の子どもを隠して彼女に子どもを探させ、やっと釈尊のところへたどり着いたとき、なぜ他人の子にもそのような慈しみの心を持たないのかと諭す。「鬼子母」は改心して受戒し、さとり（道果）を得たのちに、子どもを返してもらう。子供の数と、子供を探した日数は明記されていない。

以上、「鬼子母神の帰仏を説く経典」の内容と、「現在語られている鬼子母神の物語」との相違点について簡潔に紹介した。内容を比較してみると、「現在語られている鬼子母神の物語」に一番近いのは④『雑宝蔵経』である。このように、「鬼子母神の帰仏を説く経典」の内容には、「現在語られている鬼子母神の物語」とは異なる要素や、ほとんど知られずに抜け落ちてしまっている要素があることがわかる〈**図一**〉。そのなかのどれが正しく、どれが間違っているかを決めることはできない。

経典名	母の名前	子どもの数	失った子	子を探した日数	その他
現在語られている鬼子母神の物語	鬼子母神	500〜1000人、あるいは10000人	末子（名前は一定しない）	7日間	
『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻第三十一第七門第一子	歓喜→訶梨帝薬叉女	500人	愛児	記述なし	鬼子母神の誕生から結婚まで、前生譚、後日談が語られる。
『仏本行経』巻第四広度品第十九	諸鬼(子)母	記述なし	最小子	記述なし	多くの人民と鬼の子が帰仏する。
『大薬叉女歓喜母并愛子成就法』	歓喜	500人	記述なし	記述なし	鬼子母神が支那国の薬叉女とされている。教化の過程が省略されている。
『雑宝蔵経』（一〇六）鬼子母失子縁	鬼子母	10000人	嬪伽羅	7日間	過去世に持戒を怠ったため鬼形に生まれたと説く。
『仏説鬼子母経』	鬼子母	天上に500人、地上に500人	十数人の子	10日間	大兜国が舞台。須陀洹のさとりを得る。
『摩訶摩耶経』巻上	鬼子母	記述なし	子	記述なし	受戒のあと、さとりを得る。

図一



図二

つまり、「鬼子母神について語ったもの」には、経典だけでなく、絵画、像、僧侶の説法等さまざまな種類のものがあるが、「鬼子母神そのもの」がどのようなものなのかは、わからないということではないだろうか〈図二〉。

「鬼子母神の帰仏物語」に共通する「機能」

次に、「物語論」（ナラトロジー）における「機能」という考え方をもちいて、両者のあいだの共通点について検討してみたい。

文体論と比較詩学を専門とする橋本陽介氏は、『ナラトロジー入門―プロップからジュネットまでの物語論―』（水声社、二〇一四年）のなかで、旧ソ連の民俗学者ウラジミール・プロップ（一八九五―一九七〇）の説を解説している（橋本［二〇一四］二二―二三頁）。これによれば、ロシアの魔法物語に分類される物語には「一つの設計図」があり、その設計図を成り立たせているのが、物語の筋の進行に直接影響を与える「定項」であるという。一方、物語によって異なる要素を「不定項」という。前章において確認した、「現在語られている鬼子母神の物語」と、「鬼子母神の帰仏を説く経典」とのあいだの差異は、この「不定項」にあたると言えるだろう。

それでは、鬼子母神の物語における「定項」とはどのようなものであろうか。ここで言う「定項」とは、「物語の筋の展開に直接影響を及ぼす人物の行為」であり、「機能」と呼ばれる。「現在語られている鬼子母神の物語」と、「鬼子母神の帰仏を説く経典」の内容を見てみると、おおよそ次のような「機能」があって、「鬼子母神の帰仏物語」を成り立たせているのではないかと思われる。

①鬼子母神が人の子どもをさらって食べる。

②人々（さらわれた子どもの親）が苦しんでいることを釈尊が知る。

③鬼子母神の子どもが隠される。
④鬼子母神が自分の子どもを探す。
⑤鬼子母神が釈尊のもとにたどり着く。
⑥釈尊が鬼子母神を教化する。
⑦鬼子母神が釈尊に帰依する。
⑧鬼子母神に子どもが返される。

橋本氏によれば、同じ設計図に基づく物語であっても、「機能」のすべてを含んでいるとは限らず、省略されることもあり得るという。ただ、「機能」の順番が入れ替わるということはなく、常に同じ順番で物語の筋が進まなければならない（橋本［二〇一四］二六頁）。したがって、鬼子母神の子どもの数や、子どもを探してさまよった日数が異なっていたり、そもそもその場面が省略されていても、「機能」が順番どおりに進んでいれば、「鬼子母神の帰仏物語」であると言えることになる。

以上のことから、「現在語られている鬼子母神の物語」および「鬼子母神の帰仏を説く経典」は、共通する「一つの設計図」に基づいていながら、物語の筋の進行に影響しない部分においてはざまざまな異なる要素を持っており、ひとつの豊かな「鬼子母神の帰仏物語」という世界を作っているように見える。

「ストーリー」から「ナラティブ」へ

次に、「現在語られている鬼子母神の物語」と「鬼子母神の帰仏を説く経典」の「あり方」の違いについて考察していきたい。「あり方」とは、「どのような形で存在しているか」ということである。

「鬼子母神の帰仏を説く経典」は、それぞれ経典として個別に保存されている。一方、「現在語られている鬼子母神の物語」については、根拠となる特定の経典は見当たらないものの、「鬼子母神の帰仏物語」の「機能」を備え、変更可能な要素（不定項）に関しては、特定の経典の記述を部分的に採用するという形をとっている。また、「現在語られている鬼子母神の物語」が文章化されたものは書籍やインターネット上に数多く見られるが、内容は厳密には統一されていない。しかし、個別に名前がつけられて別々のものとして認識されているわけでもない。つまり、語る人によって微妙に形が変わりつつも、同じ「鬼子母神の物語」として認識されているのが「現在語られている鬼子母神の物語」なのではないだろうか。

ここで、「ナラティブ」（narrative）という概念を用いて、このような「現在語られている鬼子母神の物語」の「あり方」の説明を試みたい。「ナラティブ」とは、「物語」を意味する英語である。「物語」を意味する英語としては「ストーリー」（story）の方が馴染みがあるが、「ストーリー」は始まりから結末まで内容が固定されており、テキストとして保存されることが可能な「物語」を指す。「鬼子母神の帰仏を説く経典」は、テキストとして個別に保存されているので、「ストーリー」であると言える。

一方、「ナラティブ」はテキストという固定的な形では保存されない「物語」である。「ナラティブ」という概念においては、人の「語り」という点がより強調され、そのように語られる「物語」は語る人によってその形を変えつつ、人と人とのあいだの対話のなかで共有されていく。

「現在語られている鬼子母神の物語」は、内容が統一されていないにもかかわらず個別に保存されることもなく、同じ「鬼子母神の物語」として認識されていることを考えると、これは「鬼子母神に関するナラティブ」であると言えるのではないだろうか。

「現在語られている鬼子母神の物語」は「鬼子母神の帰仏を説く経典」（ストーリー）から出発していると考えられ

るが、ただ経典の内容をそのまま伝えるのではなく、「ナラティブ」という形で「語られ続けてきた」のである。

おわりに

以上、「現在語られている鬼子母神の物語」と「鬼子母神の帰仏を説く経典」とのあいだの差異と共通点を確認し、これらがひとつの設計図（機能）に基づいたうえで多彩なバリエーションを持つ「鬼子母神の帰仏物語」の集まりであり、そこに「鬼子母神の物語」という豊かな世界があったことを確認した。そして、「現在語られている鬼子母神の物語」は、人々によって「語られ続ける」という形で存在する「ナラティブ」なのではないか、という結論に至った。

ここで、「語られ続けるかどうか」は、「人々が受け入れ、必要とするかどうか」に左右されるという点に注目したい。人々の価値観は、時代によって変わっていく。特に現代においては、世界的な感染症の流行によって生活様式を大きく変えざるを得なくなり、めまぐるしく状況が変わり、先行きが見えないなかで、人々の価値観もまた揺れ動いている。価値観が変われば、「ナラティブ」も変わっていく。それは、「古くなったナラティブが捨てられる」ということではなく、人々のあいだの対話のなかで、「古いナラティブが新しいナラティブへと形を変えていく」ということではないだろうか。

したがって、「現在語られている鬼子母神の物語」を「鬼子母神に関するナラティブ」であると考えるならば、これもやはり時代の変化に伴って形を変えていくのであろうと思われる。

《参考文献》

金岡　秀友　「鬼子母の思想の成立」（宮崎英修編『鬼子母神信仰』民衆宗教史叢書九、雄山閣、一九九二年）
中井　本蓉　「現代社会における仏教的ナラティブの現状と展望」（『現代宗教研究』第五十五号、日蓮宗宗務院、二〇二一年）

「これまでの僧侶から、これからの僧侶へ―新たな時代の物語（ナラティブ）―」（『日蓮宗宗報』二〇二一年五月号、日蓮宗宗務院）
橋本　陽介『ナラトロジー入門―プロップからジュネットまでの物語論―』（水声社、二〇一四年）